

か月も二か月も刈った草が山になったのはみごとに大きくたくさん並んであります。それを雪が降るようになって寒くなつてから、今度それを毎日プレスをやっております。それでもまきがなくて困るからこの乾草をたかせるということを私が言ったら、これはバルブになるので一部家庭でも燃すことはできないんだから、お前たちはお前たちでまきをとってきてという説明で、私の炊事班では干し草を燃やして食事の準備をしたことは一回もないように思っております。

非常に私は寒いところへ、朝早く夜遅く歩くもんだから、凍傷にかかつてしまつて、ちよつと寒いと手が白くなる。でも仕事をしなければならぬし、しょうがないから手を温つたためには馬の股さ手をやつて温もりをとつて作業をした。そういうことがたびたびあります。

私に残る心のシベリア

青森県 葛西 保

寒さと飢えと、猜疑と人間不信、そして絶望のシベリアの三年間は、よきにつけ、あしきにつけ、私の心から消え去ることはない。

星霜四十有余年を経た今、体験したシベリアの三年間を凝縮して、思い出を語ることにする。

吹雪の中に見た恨みの火、有刺鉄線が張りめぐらされただけの、建物はおろか天幕もない収容所に入れられた終戦の年の十一月末、寒さによるえながら、昼は山で住む家を建てる材料集め、夜は凍りついた雪の上にたき火をして、雪の上にゴロ寝、そしてたき火の後に穴を掘り、赤松を丸太のまま積み重ねて建てたねぐらである。

こうして始まつたソ連抑留の三年の最初の地“ハラゴン”は忘れることができない。

多数の死者が出たあの伐採作業、なれぬ苦役に厳しいノルマ。劣悪極まる食事で栄養失調となり、衰弱しきって尽きぬ恨みを残して彼の地に死んでいった同胞の数は、五百人中優に百数十人に及んだ。

当時最も悲しく、そして無情に涙したものは、毎日雪の夜道に見た火葬の煙であった。

疲れ果て倒れながら作業を終えての帰途、遠く収容所方面に見えた赤い日の思い出は、半世紀にもなろうとする今日でも忘れ去ることはできぬ。

つるし上げ、重労働十五年の刑。「反動」「帝国軍人将校のにせ民主主義者」こんなやつは生かしておくな、シベリアの「シラカバの肥料」にしてしまえ。と二十二年の晩秋、コムソモリストク第十二分所大講堂でのラーゲル全行動隊員による民衆裁判である。理由は何だったのか、自分のどこに反動性があるというのか今もってわからない。

とにかく、一方的にソ連刑法の重労働十五年を科せられて営倉へ、そして警戒兵に自動小銃を擬せられながらの懲罰大隊に送られた。

覚悟を決めているものの、捕虜のむなしさ、憤りに泣いた思い出は決して消えない。しかし皮肉にも、懲罰大隊での約四か月間は、私にとっては抑留生活三年のうち、もっともしのぎやすかった思い出がある。それは、最初ゲーバーウーに連日身上調査や、ソ連のための労働に従事する旨、誓約書に署名を強制された以外は、入ソ以来初めて、「白米食」にありついたこと、そして軽作業のほかに休養ができ、アクチーブの狂乱から逃れることができたからである。今なお忘れ得ないのは営倉入りのころ、雨の夜更けに、川畑さん、吉村さん、村尾さんらの若い隊員が、警戒兵の目をかすめて、営倉の窓から毛布や飯盒飯など差し入れてくれたことである。あの感激は、前述のこととともに忘れることができない。

帰還直前まで続いた「反動の烙印」それはうそとも本当とも計りしれない。重労働十五年であったが、帰国の最集結地ナホトカにたどりつくことができた。一時はあきらめた帰国への期待と望みである。しかし、シベリアで味わった苦い思い出は、今も諸々の思い出

を秘めて残る。それは、食堂に張られたセメント袋の壁新聞に、肉太に記された私への攻撃文字であった。

「反動文士、葛西を祖国に帰すな」、彼は……と罪状が書かれてあったと記憶している。

当時、これはてっきりまた奥地へやられると覚悟し、つらく憤りに心が沈んだことである。しかし、幸いに二十三年七月末に生きて帰国することができた。

シベリア抑留の三年は、その後の自分の人生競争に、計りしれない損失を招いたことは否定できない。

反面にまた、ソ連に対する見方等多くの教訓と体験を得たその収穫もまた捨てがたいものであったと思う。

この意味で、私にとってシベリアは、生涯を通じて忘れ去ることのできない思い出の地である。

石切り作業の一年余

熊本県 井場 寿春

農家の長男であった私が、満蒙の新天地に夢を抱いて故郷を出たのは、昭和十四年六月、地元の高等小学校を卒業した三か月後でした。内原にあった満蒙開拓青少年義勇軍訓練所を卒えて、大公河義勇軍開拓団に入団しました。

昭和十九年、二十歳で現地入隊、所属したのは愛媛第六国境守備隊でした。明けて昭和二十年八月九日早暁、ソ連軍の戦車部隊が続々と国境を突破して進撃する姿を目撃、機関銃で応戦したのですが、焼け石に水でした。八月二十一日、停戦の命により、愛媛から集結地の孫呉へ向かいました。ここで武装解除、九月十四日まで満州の貨物をソ連国内に輸送するための積み込み作業に汗を流しました。

作業隊は一千人に編成されて、九月十五日黒龍江を